

〈実践報告〉

保健体育教職課程における「総合的な学習の時間の指導法」の授業研究
—振り返り授業評価による児童生徒の学びの実態から—

長岡 知*

Lesson Study on “Teaching Methods for Period of Integrated Study”
in the Health and Physical Education Teacher Training Course
～From the actual state of learning of students through retrospective
lesson evaluation～

Tomo NAGAOKA*

Abstract

本研究では学校現場における「総合的な学習(探究)の時間」に対する児童生徒の学びの実態を把握し、教職課程必修科目となった「総合的な学習の時間の指導法」の授業を検討するための基礎的資料を得ることを目的に質問紙調査を実施した。

調査は2020年11月～12月に千葉県Y市内に所在する公立小学校(4校)の6年生310名、公立中学校(4校)の2年生262名、公立高等学校(2校)の2年生154名を対象に郵送法による無記名自記方式を用いて実施した。得られた調査票から欠損値のあった児童生徒11名を除く、小学校6年生253名、中学2年生250名、高等学校2年生154名、合計657名(有効回答率98.4%)の有効回答をもとに分析を行った。学校現場における「総合的な学習(探究)の時間」の学びの実態を6項目(1. 価値, 2. 感情, 3. 知識・技能, 4. 主体性, 5. 思考・判断, 6. 協働)の観点から、児童生徒が各校種段階での振り返り授業評価を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。小学校、中学校の義務教育段階では各項目において肯定的な回答の割合が80%以上と高く、小学校-中学校の校種間比較において各項目に有意な差は見られなかった。一方、高等学校においては、中学校-高等学校の校種間比較において6項目全てにおいて肯定的な回答の割合は中学校より低く、有意な差が見られた。今後、校種間連携や高等学校の「総合的な探究の時間」についての課題を明らかにしていく必要性が示唆された。

Key words: 教職課程, 児童生徒, 総合的な学習の時間の指導法

I. 緒 言

「総合的な学習の時間」は、1999年3月に告示された学習指導要領の改訂において創設された³⁾。しかし、教科指導や行事運営などでの教員の多忙化、

評価方法が確立されていないなどから、当時、「総合的な学習の時間」の創設の趣旨が十分に達成されていない状況も見られた。

2018年の新たな学習指導要領の改訂においては、変化の激しい社会に対応して、探究的な学習や他者と協同して課題を解決する活動を通して、児童生徒の資質・能力(コンピテンシー)を育成することが求められている。学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、2018年に「小学校学習指導要領(平成29年

* 順天堂大学スポーツ健康科学部健康学科

Faculty of Health and Sports Science, Department of Health, Juntendo University

責任著者: 長岡 知

E-mail: tm-nagaoka@juntendo.ac.jp

告示) 解説 総合的な学習の時間編」⁷⁾、「中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編」⁸⁾が示され、小学校は2020年(令和2年度)から、中学校は2021年(令和3年度)から全面实施となった。高等学校では2019年に「高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説 総合的な探究の時間編」⁹⁾が示され、これまでの「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」へと教科名が改められた。高等学校においては2022年(令和4年度)から全面实施となった。今後ますます、「探究の過程」を通して、学力の育成を担う「総合的な学習(探究)の時間」の取り組みの充実が求められる。

創設からこれまでの改訂において、探究活動を通じて児童生徒の主体性の育成や技能の活用・習得が重視された。しかし、一方で「一部の学校(特に中学校・高等学校)においては、ねらいや育てたい力が不明確で、児童生徒自身が、何のために活動を行い、何を学んだか自覚できていない。補充学習のような専ら教科の知識・技能の習得を図る教育が行われたり、運動会の準備など学校行事と混同された実践が行われたりしている。」といった事例が見られるなど課題が指摘されてきた⁵⁾。中央教育審議会の答申(中央教育審議会, 2016)において、「総合的な学習の時間」を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、「総合的な学習の時間」と各教科等との関連を明らかにするということについては学校により差がある。探究のプロセスの中でも『整理・分析』、『まとめ・表現』に対する取組が十分ではないという課題があることを指摘している⁶⁾。このような指摘がある中、中央教育審議会の答申(中央教育審議会, 2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」において、大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針(教職課程コアカリキュラム)を作成すること、教員の養成、研修を通じた教員育成における全国的な水準の確保を行っていくことが必要であると提言された⁴⁾。

この答申において教職課程の改革案が示され、科

目区分の大幅な変更がなされるとともに、教育職員免許法及び同法施行規則改正の2019年4月1日の施行に伴い、2019年度入学生から全国の大学において教員養成課程における必修科目として「総合的な学習の時間の指導演法」が新規に設定され、新たに履修内容を充実した教職課程が実施されることとなった。

「総合的な学習の時間」は教科の枠を越えて全教員が担うことから、教員養成段階から教科専門性を高めると共に、必修科目となった「総合的な学習の時間の指導演法」の授業内容の充実を図り、教科横断的な授業実践力を育成することが求められている。このような背景を踏まえ、先行研究では、高橋¹¹⁾や渡邊・田代¹²⁾は、総合的な学習の時間に関する大学生の意識調査を行って、高等学校の授業が低調であることなどの課題を分析している。金子・日高は「総合的な学習の時間の指導演法」の模擬授業実践について、学生のグループ活動を通して「総合的な学習の時間」の年間指導計画や発表資料の作成、相互評価をする学習活動の成果を報告している²⁾。藤本・神は中学校と高等学校の授業実践例を学生に視聴させ、演習課題を提示して実践を行い、学生の授業コメントから「総合的な学習の時間の指導演法」の授業設計における重点項目を抽出し、その効果を報告している¹⁾。教員研修を担当している各都道府県の教育センターなどにおいても、吉田・栗田が各学校における「総合的な学習の時間」の指導体制の構築について調査研究し、その成果を報告している¹³⁾。「総合的な学習の時間の指導演法」の授業内容や授業設計を検討する上で、大学生を対象とした調査報告は散見されるが、実際の小学校・中学校・高等学校に在籍する児童生徒を対象として「総合的な学習の時間」の学びの実態把握し、「総合的な学習の時間の指導演法」の授業に検討を加えた報告は少ない。

そこで本研究では、実際の学校現場における「総合的な学習の時間」の学びの実態を把握し、教職課程必修科目となった「総合的な学習の時間の指導演法」の授業検討・改善するための基礎的資料を得ること

を目的とした。

また、本研究で得られた知見は学校現場における「総合的な学習の時間」の授業改善に向けて、情報発信することで意義を見出すことができると考えている。

II. 研究方法

1. 調査対象及び方法

調査実施期間は2020年11月上旬から12月下旬であり、調査対象は千葉県Y市内に所在する公立小学校、中学校を対象とした。調査対象校の選定にあたり、事前にY市教育委員会を訪問し、各学校の「総合的な学習の時間」の学習状況やY市教育委員会の取り組み状況について担当指導主事からヒアリングを実施した(参考資料1参照)。調査対象校は地域に偏りがないようにY市教育委員会を通じて調査対象校の選定を依頼した。高等学校の選定はY市内に所在する公立高等学校普通科課程の校長へ調査依頼し、承諾を得れた2校を抽出した。選定された小学校4校の6年生310名、中学校4校の2年生262名、高等学校2校の2年生154名を対象に、郵送法による無記名自記方式を用いて実施した。

2. 調査内容

質問項目の内容は各校種共に共通質問項目にて質問紙調査を実施した(参考資料2参照)。質問の内容はこれまでの各校種における「総合的な学習の時間(以下、総合学習と言う)」の学びに対する振り返り授業評価として、先行研究¹⁰⁾を援用し、6項目(1. 価値, 2. 感情, 3. 知識・技能, 4. 主体性, 5. 思考・判断, 6. 協働)について9つの質問で構成した。「総合学習」を学ぶことの「1. 価値」については「総合学習は大切だと思う。」、「総合学習は必要だ。」の2つの質問を設定した。「総合学習」の学びについての「2. 感情」について「総合学習は楽しい。」、「総合学習を好きだ。」の2つの質問を設定した。総合学習の学びの成果として「3. 知識・技能」の習得については「総合学習で知識が深まった。」、「総合学習で様々な技能(スキル)が身についた。」の2つの質問を設定した。総合

学習の学びへの「4. 主体性」は総合学習への取り組みについて「総合学習に自ら進んで取組めた。」という質問を設定した。総合学習の学びにおいて「5. 思考・判断」を働かせて取り組めたかについて「総合学習では考えたり、工夫することができた。」という質問を設定した。総合学習の学びにおいて他者との「6. 協働」的な活動を通じて課題に取り組めたかについて「総合学習では仲間と一緒に取組めた。」という質問を設定した。各質問は4件法(1:思う, 2:やや思う, 3:あまり思わない, 4:思わない)を用いて回答を求めた。

3. 分析方法

千葉県Y市内に所在する公立小学校4校の6年生263名(回収率84.8%)、公立中学校4校の2年生251名(回収率95.8%)、公立高等学校2校の2年生154名(回収率100.0%)、全体合計668名の調査票を回収した。調査全体の回収率は92.0%であった(参考資料3参照)。得られた調査票から欠損値のあった児童生徒11名を除く、小学校6年生253名、中学2年生250名、高等学校2年生154名、合計657名(有効回答率98.4%)の有効回答をもとに分析を行った。回収した調査用紙から欠損値のある回答を除き、質問紙調査の結果について、小学校、中学校、高等学校における校種間の総合学習に対する授業評価の差を把握するため、各質問項目の回答選択肢の「思う」、「やや思う」を選択した者を「肯定的」群とし、「あまり思わない」、「思わない」を選択した者を「否定的」群とし、2群に分けて分析を行った。まず小学校、中学校、高等学校の3つの校種間の授業評価の差について、Kruskal-Wallis検定を用いて分析した。そこで有意差が認められた項目について、校種間連携の視点から小学校-中学校、中学校-高校の2校種間における授業評価の差を把握するために、 χ^2 検定により検討した。検定の際には、Microsoft Excel 2016 for Windowsを使用し、有意水準は $p < 0.05$ とした。

4. 倫理的配慮

調査の実施にあたってはY市教育委員会主管課、各校長及び保護者の同意を得て行われた。ま

た, 研究の趣旨, 研究への参加は自由意志に基づくものであり強制ではないこと, 調査票は無記名であり個人が特定されないこと, 得られた情報は研究以外の目的で用いないこと, 成績評価には関係しないことなどを口頭及び文書にて説明した. また, 調査票の提出を持って同意とみなすこととした. なお, 本調査は順天堂大学研究倫理委員会(順大ス倫第2020-18号 2020年10月24日)の承認を得て実施された.

Ⅲ. 結 果

1. 総合学習の学びについての振り返り授業評価結果

分析対象となる児童生徒, 小学校6年生253名, 中学2年生250名, 高等学校2年生154名, 計657名の回答結果である.

表1は総合学習に対する児童生徒の振り返り授業評価の結果を示したものである. 表2は振り返

表1 総合的な学習の時間に対する振り返り授業評価結果(小学校n=253, 中学校n=250, 高等学校n=154)

	質 問 項 目	校種	%	SE	95%CI	H 値	p 値
価値	1. 総合学習は大切だと思う.	小学校	94.9	0.011	94.3-98.7	26.927	<0.001
		中学校	91.1	0.017	87.6-94.7		
		高等学校	78.4	0.033	71.9-84.9		
感情	2. 総合学習は必要だ.	小学校	93.8	0.015	90.8-96.7	22.014	<0.001
		中学校	90.4	0.018	86.7-94.0		
		高等学校	77.1	0.033	70.5-83.8		
感情	3. 総合学習は楽しい.	小学校	88.0	0.020	84.0-91.9	52.905	<0.001
		中学校	87.2	0.021	83.0-91.3		
		高等学校	64.7	0.038	57.1-72.3		
感情	4. 総合学習を好きだ.	小学校	84.8	0.022	80.4-89.2	35.252	<0.001
		中学校	84.0	0.023	79.4-88.5		
		高等学校	62.1	0.039	54.4-69.8		
知識・技能	5. 総合学習で知識が深まった.	小学校	90.6	0.018	87.1-94.2	34.318	<0.001
		中学校	87.2	0.031	40.8-53.2		
		高等学校	67.3	0.037	59.9-74.8		
知識・技能	6. 総合学習で様々な技能(スキル)が身についた.	小学校	83.2	0.023	78.7-87.8	42.000	<0.001
		中学校	80.7	0.024	75.8-85.6		
		高等学校	57.5	0.039	49.7-65.3		
主体性	7. 総合学習に自ら進んで取組めた.	小学校	86.8	0.021	82.6-90.9	29.296	<0.001
		中学校	84.3	0.023	79.8-88.9		
		高等学校	67.3	0.037	59.9-74.8		
思考・判断	8. 総合学習では考えたり, 工夫することができた.	小学校	88.4	0.020	84.4-92.3	42.815	<0.001
		中学校	86.4	0.021	82.1-90.6		
		高等学校	70.6	0.036	63.4-77.8		
協働	9. 総合学習では仲間と一緒に取組めた.	小学校	89.9	0.018	86.2-93.6	61.732	<0.001
		中学校	94.0	0.015	91.0-96.9		
		高等学校	74.5	0.035	67.6-81.4		

「1: 思う 2: やや思う 3: あまり思わない 4: 思わない」について「1: 思う」と「2: やや思う」を合わせて「思う」とした割合を示している.

95%CI: 95%信頼区間

群内比較: 小学校-中学校-高等学校, 3群間の差について, Kruskal-Wallisの検定を実施した.

表2 振り返り授業評価結果の2校種間比較（小学校 n=253，中学校 n=250，高等学校 n=154）

	質問項目	校種間	p値
価値	1. 総合学習は大切だと思う.	小-中	0.026
		中-高	<0.001
	2. 総合学習は必要だ.	小-中	0.175
		中-高	<0.001
感情	3. 総合学習は楽しい.	小-中	0.458
		中-高	<0.001
	4. 総合学習を好きだ.	小-中	0.495
		中-高	<0.001
知識・技能	5. 総合学習で知識が深まった.	小-中	0.137
		中-高	<0.001
	6. 総合学習で様々な技能（スキル）が身についた.	小-中	0.447
		中-高	<0.001
主体性	7. 総合学習に自ら進んで取組めた.	小-中	0.283
		中-高	<0.001
思考・判断	8. 総合学習では考えたり，工夫することができた.	小-中	0.320
		中-高	<0.001
協働	9. 総合学習では仲間と一緒に取組めた.	小-中	0.247
		中-高	<0.001

小学校（小）-中学校（中），中学校（中）-高等学校（高）における2校種間において χ^2 検定を実施した。

り授業評価の小学校-中学校，中学校-高等学校の2校種間における比較結果を示したものである。

1) 価値

総合学習の学びの「価値」項目について「総合学習は大切だと思う.」，「総合学習は必要だ.」という質問においては，「総合学習は大切だと思う.」と回答した者は小学校（94.9%），中学校（91.1%），高等学校（78.4%）であった（ $p<0.05$ ）（表1）。学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる。小学校-中学校，中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果，特に中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した（表2）。「総合学習は必要だ.」と回答した者は小学校（93.8%），中学校（90.4%），高等学校（77.1%）であった（ $p<0.05$ ）（表1）。同様に学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる。小学校-中学校，中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果では，中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した

（ $p<0.05$ ）（表2）。

2) 感情

総合学習の学びの「感情」について「総合学習は楽しい.」，「総合学習を好きだ.」という質問においては，「総合学習は楽しい.」と回答した者は小学校（88.0%），中学校（87.2%），高等学校（64.7%）であった（ $p<0.05$ ）（表1）。学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる。小学校-中学校，中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果，特に中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した（ $p<0.05$ ）（表2）。「総合学習を好きだ.」と回答した者は小学校（84.8%），中学校（84.0%），高等学校（62.1%）であった（ $p<0.05$ ）（表1）。学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる。小学校-中学校，中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果では，中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した（ $p<0.05$ ）（表2）。

3) 知識・技能

総合学習の学びの成果として「知識・技能」の習得について「総合学習で知識が深まった.」,「総合学習で様々な技能(スキル)が身についた.」という質問においては「総合学習で知識が深まった.」と回答した者は小学校(90.6%),中学校(87.2%),高等学校(67.3%)であった($p < 0.05$) (表1). 学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる. 小学校-中学校, 中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果, 中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した($p < 0.05$) (表2). 「総合学習で様々な技能(スキル)が身についた.」と回答した者は小学校(83.2%),中学校(80.7%),高等学校(57.5%)であった($p < 0.05$) (表1). 学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる. 小学校-中学校, 中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果では, 中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した($p < 0.05$) (表2).

4) 主体性

総合学習の学びへの「主体性」について「総合学習に自ら進んで取り組めた.」と回答した者は小学校(86.8%),中学校(84.3%),高等学校(67.3%)であった($p < 0.05$) (表1). 学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる. 小学校-中学校, 中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果, 中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した($p < 0.05$) (表2).

5) 思考・判断

総合学習の学びにおいて「思考・判断」を働かせて取り組めたかにおいて「総合学習では考えたり,工夫することができた.」と回答した者は小学校(88.4%),中学校(86.4%),高等学校(70.6%)であった($p < 0.05$) (表1). 学年が進行するにしたがって減少傾向が見られる. 小学校-中学校, 中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果, 中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した($p < 0.05$) (表2).

6) 協働

総合学習の学びにおいて他者との「協働」的な活動を通じて課題に取り組めたかにおいて「総合学習では仲間と一緒に取り組めた.」と回答した者は小学校(88.4%),中学校(94.0%),高等学校(74.5%)であった($p < 0.05$) (表1). 中学校が最も高い割合を示した. 小学校-中学校, 中学校-高等学校の2校種間における割合を比較した結果, 中学校-高等学校の2校種間において肯定的な回答の割合は有意に減少した($p < 0.05$) (表2).

Ⅳ. 考 察

本研究では, 児童生徒を対象に各校種でのこれまでの総合学習の学びについて, 振り返り授業評価を実施した. 児童生徒の総合学習に対する学びの実態を6つの項目(1. 価値, 2. 感情, 3. 知識・技能, 4. 主体性, 5. 思考・判断, 6. 協働)について, 小学校, 中学校, 高等学校の校種間にて比較し検討した.

1. 義務教育段階(小学校・中学校)

総合学習の学びの実態において, 小学校, 中学校では6項目の全てについて80%以上の高い肯定的な回答の割合を示していた. 総合学習の学びについての「価値」の認識において肯定的な回答は9割を超えており, この結果からY市内に所在する小学校, 中学校の義務教育段階においては充実した授業実践が展開されていることが窺える. しかし, 小学校から中学校へ校種が移行することで各項目の肯定的な回答の割合はわずかであるが減少する傾向が見られた. 中学校においては進路選択を控え, 受験教科と総合学習の関連など生徒の意識において変化が見られはじめることも推察される. 中学校においては「協働」の項目については小学校を上回った. このことは中学校における総合学習の授業展開ではグループ活動を積極的に取り入れ展開されていることが推察できる. 6つの項目中で小学校, 中学校共に低い割合を示したのは「知識・技能」項目の「総合学習で様々な技能(スキル)が身についた.」であった. 総合学習において「何ができるようになった

のか」を実感できる探究的な学習活動を検討することが課題と指摘できる。Y市教育委員会では管内の小学校、中学校において総合学習の探求課題として「持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)」を設定している。教育委員会が組織的・計画的に枠組みを示し、各校においては学校や地域の実態、児童生徒の特性に応じて学校独自に授業実践に取り組んでいる。本調査の結果はその成果が示されたことと推察され、Y市教育委員会における総合学習の取り組みは多くの示唆を与えてくれる。

2. 高等学校

高等学校では6項目全てにおいて小学校、中学校の義務教育段階に比べて、学びの実感や取り組みが有意に減少することが示された。「小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分展開されているとは言えない状況にある。」⁶⁾と指摘されているが、その指摘を裏付ける結果となった。各校種段階における総合学習の成果を踏まえ、校種間連携の必要性が指摘されているが、小学校-中学校との校種間に比べ、中学校-高等学校における校種間比較においては、6項目全てにおいて、高等学校では肯定的な回答の割合が有意に減少していることが示された。特に高等学校においては「知識・技能」項目において最も低い割合を示し、総合学習の学びの成果の実感が得られていない実態が明らかになった。筆者は2022年4月に「総合的な学習の時間の指導法」の授業において、保健体育教職課程を履修する大学2年生324名を対象に予備調査を実施した。中学校、高等学校での「総合的な学習の時間」の実施状況及び教科意識を把握するために、同様の質問項目を用いて実施した調査結果においても「知識・技能」項目の「総合学習で知識が深まった。」(79.7%)、「総合学習で様々な技能(スキル)が身についた。」(75.5%)の2項目の肯定的な割合が最も低い結果となった。この予備調査の結果からも、高等学校の学びの実態においては一般的な傾向として指摘することができると思われる。高等学校における総合学習においては「活動あって学びなし」と

なることがないように「知識・技能」の定着を図ることが求められる。高等学校の学びの低調さの背景としていくつかの課題を指摘できるであろう。高等学校における総合学習の授業時間数の取扱いについては各学校の特色を生かし、生徒の実態に応じた弾力的な運用(3単位~6単位)が可能であることから、その裁量において学校間格差が生じやすいこと。また、小学校、中学校に比べ、教科担任制による教員の教科縦割りの意識が強くなりがちなこと。生徒の意識において受験教科科目との関連性が低いことなどから、総合学習の学びに意義を見だしにくいことなどが推察される。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界においては千葉県Y市内における公立学校の限られた対象校を抽出し、調査実施したことから協力校の実態や特性、市教育委員会などの施策や取り組みなどの影響を考え、結果を一般化して捉えることには慎重であるべきである。

今後、対象校数や調査対象地域を広げ、総合学習の学びの実態や教科特有の共通課題について検討していくことが必要である。

VI. 結 論

本研究では小学校、中学校、高等学校の児童生徒を対象にし、各校種の学校現場における「総合的な学習の時間」の授業に対する児童生徒の学びの実態把握し、教職課程必修科目に設定された「総合的な学習の時間の指導法」の授業検討・改善の基礎的資料を得ることを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

学校現場における総合学習の学びの実態(1. 価値, 2. 感情, 3. 知識・技能, 4. 主体性, 5. 思考・判断, 6. 協働)では、小学校、中学校の義務教育段階では児童生徒は各項目において肯定的な回答の割合が高く、小学校-中学校の校種間において各項目には有意な差はみられなかった。一方、高等学校の学びの実態においては、中学校-高等学校の校種間において6項目全てにおいて肯定的な回答

の割合は中学校に比べ有意に減少し、差が見られた。校種間連携や高等学校における総合学習の課題が窺えた。本調査の結果を踏まえ、中学校、高等学校教員養成においては教科専門性を高めると共に「総合的な学習の時間の指導法」の授業検討・改善を図り、教員志望学生に対し教科横断的な意識と授業実践力を育成することの必要性が示唆された。

Ⅶ. 利益相反

本論文に関し、開示すべき利益相反に該当する事項はない。

引用文献

- 1) 藤本義博, 神 孝幸 (2020) 教職科目「総合的な学習の時間の指導法」の授業設計についての重点抽出に関する研究. 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学, 56, 83-93.
- 2) 金子研太, 日高和美 (2019) 「総合的な学習の時間」に関する指導方法の検討—教育方法論におけるカリキュラム・マネジメントの模擬実践を通じて—. 九州共立大学研究紀要, 9(2), 69-77.
- 3) 文部科学省 (1998) 小学校学習指導要領 (平成10年12月).
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1319944.htm (参照日2022年6月14日)
- 4) 文部科学省 (2015) 中央教育審議会, 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (参照日2022年6月13日)
- 5) 文部科学省 (2015) 中央教育審議会教育課程部会, 生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ資料, 「総合的な学習の時間について」.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/
[chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (参照日2022年6月12日)
- 6) 文部科学省 (2016) 中央教育審議会答申, 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」, 236.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (参照日2022年6月12日)
- 7) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説, 総合的な学習の時間編, 東京, 東洋館出版.
- 8) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説, 総合的な学習の時間編, 東京, 東山書房.
- 9) 文部科学省 (2019) 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説, 総合的な探究の時間編, 東京, 学校図書株式会社.
- 10) 野津有司, 和唐正勝, 渡邊正樹, 西岡伸紀, 植田誠治, 高橋浩之, 岩田英樹, 渡部基, 今関豊一, 戸田芳雄 (2007) 全国調査による保健学習の実態と課題—児童生徒の学習状況と保護者の期待について—. 学校保健研究, 49(4), 280-295.
- 11) 高橋亜希子 (2019) 高校での学習に関する大学生への回顧質問紙調査—総合的な学習・授業形態・自主活動・高校での学びに関して—. 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 18, 37-55.
- 12) 渡邊 均, 田代裕一 (2020) 「総合的な学習の時間」に関する研究 I—大学での教職教育への示唆—. 西南学院大学人間科学論集, 16(1), 227-264.
- 13) 吉田早織, 栗田 泉 (2020) 総合的な探究の時間に関する研究 [中間報告]. 神奈川県立総合教育センター研究集録39, 9-18.

令和4年8月17日 受付
令和4年8月24日 採録決定
令和4年9月20日 早期公開

（参考資料1） Y市教育委員会 調査事前ヒアリング内容

- 実施日時：令和2年9月14日（月）14：00-15：00
- 面談者：「総合的な学習の時間」担当指導主事

1. 小学校・中学校の「総合的な学習の時間」の取組み状況について

- ・Y市教育委員会では市内小学校、中学校において「持続可能な社会の創り手を育成」を目標にESDの視点に立った学習指導を展開している。

※ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されている。

今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題がある。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。

2. 「総合的な学習の時間」の研究指定校の取組状況について

- ・市内小学校、中学校において「総合的な学習の時間」の研究指定校は設定していない。
- ・教員経験者研修などの際に学校側から要望があれば学校訪問し、指導助言を行っている。

3. 「総合的な学習の時間」の教員研修実施状況について

- ・Y市教育研究会に設置されている「総合的な学習の時間」の教科部会が中心となって年度に2回、研修会を実施している。
- ・研修内容は主に施設見学などで研修内容の充実が課題となっている。

4. 教育委員会（指導主事）としての取組みと課題について

- ・現在、教員養成課程で「総合的な学習の時間」の指導法や内容について学んでいない現場教員が多いため、学校間や教員間において授業への意識や取り組みに差が見られる。
- ・校長のリーダーシップによって学校間の取組みに差が見られる。

（参考資料2）

総合的な学習（探究）の時間」に関するアンケート（対象：児童・生徒）

【アンケート調査協力へのお願い】

調査主体：順天堂大学

学校での「総合的な学習（探究）の時間」（以下、総合学習と言います）の学習をふりかえり、次の質問についてお答えください。このアンケートから得られた結果は今後の授業改善に活用させていただきます。答えた内容が成績や進路等に影響することはありませんので、あなたの率直なご意見をお聞かせください。

問1 1. 小学6年生 2. 中学2年生 3. 高校2年生

問2 今までの「総合学習」の学びについてふりかえり、あなたのお気持ちに近い番号を選んで○印をつけてください。

【1：思う 2：やや思う 3：あまり思わない 4：思わない】

- | | | | | | | | |
|---------------------------|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 総合学習は大切だと思う。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 2. 総合学習は必要だ。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 3. 総合学習は楽しい。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 4. 総合学習を好きだ。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 5. 総合学習で知識が深まった。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 6. 総合学習で様々な技能（スキル）が身についた。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 7. 総合学習に自ら進んで取組めた。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 8. 総合学習では考えたり，工夫することができた。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |
| 9. 総合学習では仲間と一緒に取組めた。 | 1 | ・ | 2 | ・ | 3 | ・ | 4 |

問3 あなたは「総合学習」の授業を学んで、どのようなことが身に付きましたか。
ご自由に書いて下さい。

（参考資料3）

調査対象校の基本情報及び調査票回収状況

NO	学校種別 数値は R2.5.1 現在	学級数	教員数	在籍数	児童・生徒対象		
					配布数	回収数	回収率(%)
1	A 小学校	11	15	218	41	35	85.4
2	B 小学校	18	26	544	107	71	66.4
3	C 小学校	15	22	405	80	79	98.8
4	D 小学校	24	32	696	82	78	95.1
小計（小学校）					310	263	84.8
5	A 中学校	15	27	360	56	56	100.0
6	B 中学校	9	19	134	39	39	100.0
7	C 中学校	15	27	474	92	90	97.8
8	D 中学校	26	45	878	75	66	88.0
小計（中学校）					262	251	95.8
9	A 高等学校	26	66	1077	77	77	100.0
10	B 高等学校	23	60	938	77	77	100.0
小計（高等学校）					154	154	100.0
合計（全校種）					726	668	92.0